



楊佩瑾 著

七星劍

七 星 劍

楊 佩 瑾 著

万 青 力 画

外 文 出 版 社

北 京

七 星 劍

1978年 初版発行

著 者

插 画

出 版 者

発 行 者

楊 萬 外

中 国

僑 文 出 版 社

(北京 成 豐 街 吉 寧 街)

中 国 国 際 書 店

(北 京 P.O. Box 399)

取 扱 店

東方書店(東京) 旺 東 書 店(東京)

中国書店(福岡)(株)内山書店(東京)

(株)満 江 紅(東京) 朋友書店(京都)

(株)燎 原 書店(東京) 中華書店(東京)

編 号 : (日) 10050-898

10-J-1432S

00290 (精)

中朝両国人民の長期にわたる助けあいの友好
関係は、共同の闘争で流した尊い鮮血によって
固く結ばれたものである。

毛 沢 東

目次

第一章	雷雨の夜……………	1
第二章	まっこうから対決……………	52
第三章	偵察兵の翼……………	113
第四章	「七星剣」……………	202
第五章	敵を引きずりまわす……………	277
第六章	流星の閃光……………	328
第七章	血潮で描かれた座標……………	395
第八章	総攻撃の前夜……………	436
第九章	エピローグ……………	473

第一章 雷雨の夜

一

一級偵察英雄の称号を授けられた師団偵察隊長、^{ヤシシゴラン}長梁寒光が、一偵察小分隊を率いて第八中隊の守備している陣地——無名高地に着いたのは、ちようど敵がここに猛烈な砲撃を浴びせ終わつたばかりのときだった。

一九五三年七月上旬、ある蒸し暑い午後のことである。砲声が止み、急に静けさをとりもどした山上の陣地には、鼻をつくような硝煙が一面に立ちこめている。山の斜面には、まばらに

生えていたハイマツや、名も知らぬ薄紫の小花を咲かせている灌木^{かん}の茂みが、さきほどの砲撃に根こそぎ掘り起こされ、砲弾にうがたれた穴の周りには、炸裂^{さく}したときにふっ飛んだ弾片にそぎ落された木の枝が散乱し、まだくすぶり続^つけている。

陣地全体が灰色の煙霧におおわれている。ただ一つ、戦士たちが「前線哨兵^{しやうへい}」と誇りをもつて呼んでいるあの闊葉樹^{かつ}の青櫚樹だけは、依然として少しも損なわれずに、陣地の左側の陰しい崖^{がけ}の上にそそり立っていた。この青櫚樹はこれまでにもたびたびねらい撃ちされたが、ついぞ一度も当たったことがなかったのである。

砲撃がもたらした濃煙やほこりがだんだんうるると、敵の見張り所の望遠鏡には、あのはつらつとしてそそり立つ英姿が、またもや頑強にうつし出されるのであった。今、この木は白雲のただよう青空を頭上にいただき、連山群峰を見下ろしながら、真っ直ぐな幹にこんもりと茂らせた枝葉を硝煙のただよう風の中で軽く揺れ動かしている。そのゆったりと落ち着きはらったさまは、まるで何ものをもおそれざる哨兵のごとく、前線陣地を守り、敵のあの氣違いじみた砲撃をものもしないようであった。砲聲が止んで間もなく、どこから飛んできたのかセミが一匹この木の枝にとまり、二枚の透き通る羽をふるわせたかと思うと、だしぬけに高い声で鳴き出した。

「ティシ——タコト、ネイ！ ティシ——タコト、ネイ！」

かん高いセミの声を聞きながら、梁寒光と四人の偵察兵は険しい崖の後ろ側の切り立つような小道を、葛や藤のつるにつかまってよじ登り山頂に出た。それからまた「前線哨兵」の足下にある天然の洞穴をくぐりぬけ、交通壕に就いて第八中隊本部の所在する地下道に向かって足を速めた。今晚、かれらは「鋼鉄第八中隊」の協力のもとに、敵味方相對峙する最前線にくぐり、敵の後方に入って「舌」を捕えてくるという緊急任務を執行することになっている。

任務は緊迫している。というのは師団本部の得た情報では、最近、敵はほとんど昼夜を分かたずパトロール小分隊を緩衝地帯に派遣しており、特に夜間の動きが目立ってふえてきている。それとともに、敵が慣例的におこなう砲撃に、これまでとは違った大型砲の試験的砲撃が混じっている。そしてこのような試験的砲撃に

ともない、敵の偵察機の出動回数もふえてきているのだ。更に注目すべきことは、友軍の人民軍師団本部からの電報によると、数日前、敵の後方で活躍している金鐘万遊撃隊と無線電信で連絡中、ふっと通信がとだえてしまった。もしや遊撃隊が敵の襲撃を受けたのでは……。これらすべては、はつきりとこれまでとは違う動向をあらわしている。すなわち、板門店における交渉の席上で「大砲と弾丸で弁論せよ」とわめく敵は、今、新たな戦略を着々と準備しつつあるということだ。このため、師団長は今日午前、梁寒光を本部に呼び出し、自らかれに今晚敵の陣地に潜入し、敵の将校を一人つかまえてくる任務を与えたのである。

「必ず将校を一人つかまえてきてくれ！ 事情に通じてるやつをな」

と師団長は強調し、きびしい面持で梁寒光を

見やりながら念をおした。

「『ムントウンクリ』* など、わしはいらんぞ。できるかね」

「だんこ任務を果たしますすー」

梁寒光は力強く答えた。

「師団砲兵隊がきみらの行動に協力する。きみらは第八中隊の前方の最前線をくぐりぬけて行くのだ。具体的な方法は偵察科で検討してくれ」

梁寒光が師団本部から出てきたときは、もう太陽が頭上にきていた。かれは偵察隊に帰るとすぐにえりぬきの勇敢な偵察小分隊を率い、急行軍の速度で出発した。二時間半足らずで、第八中隊の陣地に着いたのである。

梁寒光は汗でびっしょり、大粒の汗が顔から

* 朝鮮語で「ばんくら」の意。

滴り落ちた。かれは腰のタオルを手にとるとカムフラージュの小枝の輪をのせた洗いざらしの古い軍帽を持ち上げ、力を入れて汗をふきとった。それからまた両手で帽子のへりを持ち、きちっと眉の上までかぶった。かれは今年二十四歳だが、すでに八年の戦闘歴をもっている。やや高めの背たけ、均整のとれた体軀、整った目鼻立ち、剣型の眉の下には、一對の生き生きした黒いひとみが輝き、そのまなざしには落ち着きと鋭さがあつた。部隊の中で育つた多くの「ちびっこ少年兵」がみなそうであるように、この年若い勇敢な偵察隊長も、なにごといいかげんにはしない古参戦士ながらの深い思慮と機敏さ、果敢さを全身にみなぎらせていた。

梁寒光の後に続く四人の偵察兵もみな隊長のように、雑木の枝でつくったカムフラージュの輪を頭にのせ、自動小銃を肩にかけている。暑

さで顔中汗だらけではあつたが、どれもこれも軍装は整い、元氣にあふれ、勇猛できびきびしており、軽い足どりで交通壕こうごうの中を通り過ぎて行く。

さきほどの砲撃を受けて、塹壕ざんごうも何か所か崩されていた。砲声が止むとすぐに地下道から出てきた第八中隊の戦士たちは、シャベルで懸命に崩された胸壁を修復していた。足早に近づいてくる偵察兵を目にしたとたん、戦士たちの間にはわかに賑やかになった。かれらは偵察兵たちと呼びかけ、愉快そうに冗談を言い始めた。

「ほっ、『ばた屋さん』がまたおいでなすつたぞー！ 今度拾ってくるのは『カンヅメ』ですかい。それとも『にぎり飯』ですかい？」

第八中隊の同志は、この全師団きつての有名な偵察英雄とその偵察兵たちをよく知っていたし、また尊敬してもいた。これまで幾度とな

く、かれらは激動と不安な気持を胸に、偵察兵たちが敏捷に塹壕をはい上がり、音もなく夜のやみの中に姿を消して行くのを見守るとともに、密集した火力で巧みに敵の注意を自分の方に引きつけ、偵察兵たちが敵の最前線を通りぬけるのを掩護したものだ。またかれらは幾度、敬服と羨望の気持で、「舌」を引きずり、勝利を収めて帰ってくる戦友たちを迎えたことであろう。これも去年の冬のことだったが、そのとき梁寒光は偵察小分隊を率いて敵の塹壕に忍びより、一度に二人の「舌」を捕えてきた。そのときかれらは神業まがいのすばやさで不意を突いたので、ちょうど食物をほおぼっていた二人の敵は、叫び声一つあげる間もなく、上半身と手中の食物もろとも、すっぱりと厚いざらざらした麻袋に入れられてしまった。第八中隊の陣地に帰りつき、麻袋から捕虜を出してみたら、

何と捕えてきたのは米軍中尉と李カイライ軍上等兵だった。高い鼻、くぼんだ目の米国の鬼め、は、おそれをなしてふるえが止まらない。カンヅメ罐を麻袋の中で引っくり返したので、汁のついたイワシが体中にくっついていていた。そして、あんまりたまげてぼけてしまった李カイライ軍上等兵は、麻袋から出してやっても、まだ手の中にしっかりと凍ったようになってにぎり飯を握ったままだった。このときから、第八中隊の戦士や偵察兵の間では、「カンヅメ」と「にぎり飯」が、それぞれ米国兵と李カイライ兵のあだ名になったというわけである。狙撃兵の中には、にこにこ顔で自分の狙撃戦果を報告するときなど、「三号目標の敵五人をやっつけました。一人は『カンヅメ』、四人は『にぎり飯』であります！」と口をついて出てしまうような者もいた。今、偵察兵たちがまた第八中隊の

陣地にやってきて、新たな任務の遂行のため出かけようというとき、戦士たちは、いつものような問いかけで、かれらを歓迎したのである。

第八中隊の政治指導員吳興洲^{ウーシンヂョウ}は、折から地下道の入口に「狙撃成績表」を張っているところだったが、偵察兵たちが急ぎ足でやってくるのを目にすると、すぐに進み出て梁寒光と握手を交わし、にこにこ顔で声をかけた。

「こりゃ、何て早いんだ。今大隊本部から電話で通知を受けたばかりなのに、もう着いたとは。——何かい、また熊ん蜂の巣をつつきにいくんだって？」

「敵のあの熊ん蜂の巣はとうにあなたたちの手で、収拾がつかんほどにつつつきまわされてるじゃないですか」

梁寒光は狙撃成績表を眺め、感嘆して言葉をついだ。

「へっ、また二十数人もふえている。よくやったもんだ。今月はまだ二十日にもなっていないのに、もう百十三人もやつつけたんですか。もうちょっとで一個中隊ですね」

「梁隊長！」

大男の孫機関銃手が背後から声をかけた。かれはシャベルで塹壕の胸壁に土をのせながら、がらがん響くどら声で問いかけてきた。

「いつになったらまた分割包囲をやらしてもらえるんですかい。いつまでもこんなチョビチヨビたたいてるんじゃ、クラーク*のやつ、ちつとも痛かあないですよ」

梁寒光は振り返り、笑いながら言った。

「でかさん、あんたはクラーク本人ですかい。どうして痛かあないとわかるんです？こ

* 朝鮮侵略のアメリカ軍司令官。

んなに何百もチヨビチヨビやられてるんだ。ク
ラークめにどれだけの「カンヅメ」と「にぎり
飯」があるというんですか」

戦士たちはどつと笑い出した。大男の孫さん
もまた汗だらけの顔を一なでし、はっはっとは
かでかい笑い声をたてた。しかし、呉政治指導
員が梁寒光と偵察兵たちをともなうて地下道に
入ってしまうと、かれはどなるような大声で、
まわりの戦士たちと議論を始めた。

「なに笑ってるんだ。わしゃあとくにお見
通しよ。わが師団の偵察隊長様のお出ましとく
りゃあ、へっ、分割包囲、迂回に突入、見どこ
ろはこれからよ。信じないんなら見てるがいい
さ！」

梁寒光と偵察兵たちは、地下道に入ると急に
さわやかな涼しさを覚えた。西に傾いた日ざし
が、地下道の入口に生えている二本の小松を通

して、無数の細かな光を地下道の中に投げしてい
た。それはこのきちんと整頓されて清潔な「陣
地の家」を、なおさら和やかな快適な雰囲気
にしていた。中隊本部の文書係——ひじょうにま
じめでしかつめらしい顔つきの若い戦士が地下
道の入口に向かい、弾薬箱の上に上半身を伏せ
るようにして、一心に何か書いていた。かれは
梁寒光一行が来たのに気がつく、と、ぱっと立ち
上がって、すでに準備されていた冷い湯冷まし
の入ったいくつかの軍用水筒を、偵察兵たちに
手渡した。そしてかれらの頭のカムフラージュ
の輪を遠慮なく取って、地下道の石の壁にきち
んと並べてかけ、よく磨かれた落葉松の丸太に
腰かけるよう促した。ここでかれは始めてかれ
らに笑顔を向け、弾薬箱のそばに戻って、引き
続き書きものにかかった。偵察兵たちは、この
しかつめらしい顔のちび文書係とはとくにお

なじみである。だから、かれらも遠慮せず、軍用水筒の水をゴクゴクとラッパ飲みし、空っぽにしてしまった。もしそばに二つの部隊の隊長がいなかったら、かれらは例のごとくちよつとばかりいたずらをして、このしかつめらしいちび戦士をからかうところだった。

呉興洲は梁寒光を促して、入口に近い大きな黒石の上に腰を下ろし、すぐに偵察小分隊の今夜の出動について検討を始めた。呉興洲は前線陣地の指揮者として、これまでに何度も、梁寒光と偵察兵たちが敵の後方深く潜入して任務を達成するのに協力してきている。かれは、偵察兵たちが今回も極度にきびしい危険な状況のもとで戦わなければならないことを、よく知っている。かれは、自分がかれらとともに最大の危険を分かち合うことができないのを、まるで大きな罪悪であるかのようにさえ感じているの

だった。だから、かれはいつもあらゆる方法を尽くして、協力態勢ができる限り完べきであるよう頭をしぼり、戦友たちの危険と困難が少なかれと願うのであった。かれは静かに話し始めた。

「大隊本部は師団偵察科の指示により、わが中隊に軽重火力をうまく組織して、きみたちの今晚の捕虜捕^{とら}捉の任務に、全力を尽くして協力するよう命令してきた。趙中隊長は今晚の配置のため、すでに各小隊陣地に出かけていった。出発のルートとして、われわれは新たに別の道を選んだよ」

ここまで話して、呉政治指導員は言葉をきり、ちよつとばかり心配そうに梁寒光を見やっていた。

「それは、われわれは最近、敵の緩衝地帯に對するパトロールと監視が、ますますきびしく

なつたことに気づいたからなんだが……」

梁寒光は軽くなずいた。敵が急に警戒と反偵察活動を強化したことは、別に意外なことではなかった。かれらの今晚の任務はほかでもない、この「なぞ」を解くことなのである。来る道すがら、かれは今晚の出動について、あれこれ周到に思いをめぐらせていた。かれは豊富な戦闘経験をもつベテランの偵察兵だから、何度も敵の陣地に入出しており、敵陣の様子や敵軍の活動法則などについて他の誰よりもはるかに詳しい。しかしながら、戦争中の状況は、常に瞬時に千変万化することをまた知りぬいている。燃焼する土地を固守し、日夜敵と生きるか死ぬかの戦いを続けている戦士こそが、陣地に起こったごくわずかな変化を一番はつきりとつかんで、敵の一つ一つのかくれた動向をすばやくキャッチすることができるのであり、また敵

を打ち破るための限らない知恵と経験を有するのである。だからこそ、梁寒光はいかなるときも、前線陣地の指揮者や戦士たちの意見を特に尊重し、熱心に耳を傾けるのである。

この面では、紅軍時代の偵察兵ですでに髪もごましおになつてゐる老師団長が、かれの最も厳格な教師であつた。あれは梁寒光が偵察隊長になつた日のことだったが、師団長はわざわざかれを自分の掩蔽所えんぺいに呼び、自らの手で、昔の戦友が祖国から送つてくれた上等の花茶を入れてかれにすすめ、それからかれの向かいに腰をおろして、深いまなざしでじつとこの新任の偵察隊長を見つめた。それはまるで、「このひな、鷹も羽が強くなりおつたか。果たして大空を縦横にかけめぐる雄々しい鷹になれるかな」と言つてゐるようであつた。

梁寒光は師団長に見つめられてとまどつてし

まい、立ち上がって言った。

「師団長、ぼくをお呼びになったのは……」

「ま、かけなさい。飲んでからじゃ」

師団長はかれを手でおしとどめ、自分は立ち上がって掩蔽所の中をゆつくりと歩き始めたが、ふと立ち止まって口を開いた。

「梁寒光、偵察兵の任務は何か話してごらん」

「敵の状況をはつきりとつかみ、指揮者の耳目の役目を果たすことです」

梁寒光はちゅうちょせず^{シヤウシヤン}に答えたが、胸の中では師団長の質問が簡単過ぎて不思議だった。

「その通り。ということは、偵察兵の存在は敵の変化を随時掌握することにある。小梁、よく覚えておくんじや。一人だけの力ではたとえその人の体じゅうが鉄でできていても、釘にすればそれほどの数にならない。偵察兵として学

ぶことを知らず、前線の幹部や戦士に学ばず、大衆の知恵を自分の知恵に変えることができず、ただ自分の目と耳に頼るだけでは、決して指揮者のよい耳目にはなれないのだよ」

師団長はそう言いながら、きちんと整理されている毛主席の著作や文書のそばから、天安門の図案が描かれている赤茶色の表紙の小さな日記帳を取り出して、梁寒光に手渡した。

「持っていきなさい。何かを学んだらこれに書く、自分の感想もな。しっかり書きなさい。

そのうちわしが検査するから」

その手帳を受け取った梁寒光は、胸の中に熱いものがこみ上げ、全身に広がってゆくのを覚えた……

今、この若い偵察隊長は地下道の黒石の上に腰を下ろし、全神経を集中させて、第八中隊の政治指導員の話に耳を傾けている。まるで呉興

洲の話のこまこまを、自分の頭の中に刻みつけてでもいるかのよう。呉興洲の話がすんでも、かれはすぐには口を開かなかった。ただ深く考えこみながら、地下道の外の起伏する遠い山々に目をやっていた。

呉興洲はパイプを取り出して刻みたばこをつめ、ライターで火をつけ、スパスパと吸っていたが、しばらくして言った。

「小梁、きみの考えは？」

「ぼくはもう少し実地に観察してみます」

梁寒光は振り向いて答えたが、急に笑顔になつて言葉を続けた。

「まだ一つ話が残ってますね。手離すのが惜しいんではうか」

「何のことだ、そりゃあ」

呉興洲は一時ぼかんとしたが、大隊長が電話の中で、第八中隊から兵士を一人選んで偵察隊

にまわすように、とつけ加えたことをすぐに思い出して、笑い出した。

「ずるがしていやつめ、わしらをそんなにエゴイストに見んでくれよ。わしらは命令を受けるとき、いち早く趙中隊長とも相談したよ。えりぬきの腕のよい若者をきみにまわすぞ」

「誰ですか」

「二班の王振華だ。どうだね」

「王振華？」

梁寒光のまぶたには、すぐさま丸顔の明るく朗らかな若者の姿が浮かび上がった。

「あの民謡の好きな江西出身の？」

「そうだ、あいつよ。今じゃ特等射撃手だね。二、三日前に、第二班長といっしょに敵の陣地にいったばかりだ。よく機転のきくやつでな」

呉興洲はほめちぎった。

「まだ民謡を歌ってますか」

梁寒光も笑いながら聞いた。

「歌うとも。快板*もつくりおる」

「指導員、王振華のこの快板、写し終わりました。張り出しますか」

中隊本部の文書係が、今写し終わったばかりの古新聞をもって、こちらにやってきた。

梁寒光はその古新聞を手にとり、興味深そうに読み上げた。

七月の天気は上々、

狙撃活動はなはだ盛ん、

きみが一発、ぼくも一発、

敵は撃たれて逃げ場を失う。

李カイライ軍に米帝のおいばれめ、

* 早口で語る語り物。

そろっていっしょにあの世行きた。

肝をつぶした侵略軍め、

顔も出さずにでたらめ射撃。

志願軍陣地の鋼鉄中隊、

飛行機、大砲、おそれはせぬぞ、

毎日チヨビチヨビかかさずたたきや、

最後にや敵も全滅だ！

「どうだい、悪くないだろう。入隊当時は文盲だったんだが、陣地で数ヵ月速成識字法で学んで、今じゃ千以上の字が書けるようになった。まだある。きみと同様、朝鮮語はペラペラだぞ」

吳政治指導員は、もう一度ほめ上げた。

「こいつは、なかなか機転のきくやつでな。

だが、ちょっとカッとなりやすいところがある。よく面倒みてやりやあ、きつとよい偵察兵